

**日本学術振興会先端研究拠点事業（国際戦略型）
事後評価結果**

領域・分科（細目）	複合・環境学（環境影響評価・環境政策）		
拠点機関名	東京大学国際高等研究所サステナビリティ学連携研究機構		
研究交流課題名	サステナビリティ学国際メタネットワークの構築と展開		
採用期間	5年間 <table style="display: inline-table; vertical-align: middle; border: none;"> <tr> <td style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">{</td> <td style="padding-left: 10px;"> 拠点形成型：平成23年4月1日～ 平成25年3月31日 国際戦略型：平成25年4月1日～ 平成28年3月31日 </td> </tr> </table>	{	拠点形成型：平成23年4月1日～ 平成25年3月31日 国際戦略型：平成25年4月1日～ 平成28年3月31日
{	拠点形成型：平成23年4月1日～ 平成25年3月31日 国際戦略型：平成25年4月1日～ 平成28年3月31日		
日本側コーディネーター（職・氏名）	機構長・武内 和彦		
交流相手国 （国名・機関名・職名・氏名）	スウェーデン・ストックホルム大学システム生態学科・教授・Thomas ELMQVIST		
	米国・アリゾナ大学サステナビリティ学部・学部長/教授・Sander VAN DERLEEuw		
	イタリア・ローマ大学サピエンツァ校・持続可能な発展研究センター・教授・Vincenzo NASO		
	フランス・エクス=マルセイユ大学力学研究所・教授・Jean-Louis ARMAND		
	スイス・スイス連邦工科大学チューリッヒ校・国際担当副学長/建築学部教授・Gerhard SCHMITT		

総合的評価（書面評価）

評 価

- 当初の目標は想定以上に達成された。
- 当初の目標は想定どおり達成された。
- 当初の目標はある程度達成された。
- 当初の目標はほとんど達成されなかった。

コメント

本課題は、国際サステナビリティ学という国際的かつ学際的な新たな研究領域の構築を目指したものである。この課題に対して、日本側拠点機関は、International Society for Sustainability Science (ISSS) の運営と学術雑誌 Sustainability Science 誌の発行により、研究交流を進めた。これにより、世界の先端的な研究成果の収集を行い、相手国との共同研究及びセミナーの開催など積極的な連携を図ったことから、国内のサステナビリティ学の研究水準は急速に向上していると判断できる。このことから、今後の発展に向けて、拠点機関が引き続き中心的な役割を果たし続けていく基盤が形成されることが期待できる。

国際学術交流拠点の構築については、平成 24 年「国連持続可能な開発会議」で提唱された持続可能な地球社会の実現を目指す国際協働研究のプラットフォームである Future Earth との連携を計ることで、これまで当該プログラムにおいて連携してきた海外機関を超えた、より広い世界的ネットワークにおいて、国際的な拠点機関としてのプレゼンスを発揮することが今後期待される。

若手研究者の人材育成については、若手研究者が国際的な学術活動に主体的に関わる仕組みの構築に成功している。具体的には、国際サステナビリティ学会で研究成果を報告し、海外の著名な研究者と交流する機会を設けたことは、次世代のサステナビリティ学の発展を担う若手の人材の育成に大きく貢献したと評価できる。

学術的成果については、サステナビリティ学の発展に寄与する多くの成果が生み出されていると評価できる。日本での国際会議の主催と、海外での会議に日本の多くの研究者が参加しており、研究成果は国際会議で多く発表されている。学術雑誌への論文投稿もあり、わが国のサステナビリティ学の発展に寄与するところが大きい。国内学会での発表が少ない点が気になるが、交流により得た成果にかかる事業参加者以外の国内関係者への貢献は、短期的には評価できないので今後期待したい。

総合的に判断して、本課題の当初の目標は想定以上に達成されたと判断される。

1. これまでの交流を通じて得られた成果

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本側拠点機関を中心とした有機的かつ継続的な国際学術交流拠点が構築されたか。 ・ 先端的かつ高度に学術的価値のある成果をもたらしたか。 ・ 次世代の中核となる若手研究人材の育成について、方法や手法は適切であり、十分な成果をもたらしたか。 ・ 日本への先端的かつ国際的学術情報の収集整備に貢献することができたか。 ・ 社会的理解や社会的認知を促進するための手法は適切であり、社会的理解や社会的認知は進んだか。
-----	---

評 価
<p><input checked="" type="checkbox"/> 十分成果があった。</p> <p><input type="checkbox"/> 概ね成果があった</p> <p><input type="checkbox"/> ある程度成果があった。</p> <p><input type="checkbox"/> ほとんど成果が見られなかった。</p>
コ メ ン ト
<p>・ 日本側拠点機関を中心とした有機的かつ継続的な国際学術交流拠点が構築されたか。</p> <p>日本側拠点機関は、国際サステナビリティ学会を運営する中心的な役割を果たしており、学会運営をもとに海外の多数の研究拠点と有機的な連携を進めてきた。また、Sustainability Science 誌の発行により国際サステナビリティ学の研究成果を継続的に公表しており、新しい学問分野である国際サステナビリティ学をめぐる国際学術交流が進展している。</p> <p>日本側拠点機関は、こうした国際学術交流の構築において重要な役割を果たしており、人材交流と共同研究の核となる国際学術交流拠点としての機能を発展させてきた。</p> <p>・ 先端的かつ高度に学術的価値のある成果をもたらしたか。</p> <p>日本側拠点機関は、海外の多数の研究拠点及び研究領域を横断する学際的な研究者とネットワークを構築することや国際学術誌 Sustainability Science の発行を通じて、個々の研究成果を統合し、国際的な観点からサステナビリティを実現するための課題を明らかにする国際サステナビリティ学という新たな学問の基礎の確立及びその発展を促した。</p> <p>研究成果が、国際会議でも多く発表されていることから、サステナビリティ学の発展に寄与するディスカッションが行われたことが推察される。論文リストに示されている論文数は4件と少ないが、進行中の共同研究にもとづいた論文等の発表も期待される。</p>

・次世代の中核となる若手研究人材の育成について、方法や手法は適切であり、十分な成果をもたらしたか。

ISSS と連携して、日本側と相手国側の大学院生が、主体的に会議を企画・開催する機会を定期的に設けている。また、博士課程教育リーディングプログラムや Future Earth などの関連プログラムとも連携を行い、若手研究者の人材育成が進められている。多くの若手研究者が、国際会議、共同研究及びセミナー参加のために派遣・招聘されており、若手研究者による国際的研究交流が盛んに行われていることから、若手の人的ネットワークの形成や高度なコミュニケーション能力の獲得に大きく貢献したと評価できる。

国際サステナビリティ学という新たな学際的研究領域を推進する上では、個々の研究領域を超えた分野横断的な研究交流が不可欠であり、こうした人材育成方法は適切なものであると考えられる。

・日本への先端的かつ国際的学術情報の収集整備に貢献することができたか。

国際サステナビリティ学会の運営や Sustainability Science 誌の発行により海外の先端的な研究成果を収集し、サステナビリティ学に関する国際的な研究情報を共有することに成功している。また、参加各国との交流事業や ISSS の企画会議を通じて、サステナビリティ学に関連した学術情報の収集に成功していると評価できる。

今後は、Future Earth など新たな関連プロジェクトにおいても、国際的研究拠点として世界の先端的な学術情報を収集するとともに、海外に向けて研究成果を発信することが期待される。

・社会的理解や社会的認知を促進するための手法は適切であり、社会的理解や社会的認知は進んだか。

国際サステナビリティ学は、地球環境問題をめぐる社会的要請から誕生した学問分野であり、研究者ネットワークの構築による社会問題の解決を目指し、学術研究の世界にとどまらず、社会的な役割を果たすことが期待されている。

International Conference on Sustainability Science (ICSS) の開催や国際学術誌 Sustainability Science の発行を通じて、世界のアカデミアにむけて情報発信を行ってきた。連携国以外である南アフリカで ICSS を開催することで、持続可能な発展が課題となっているアフリカ地域でのサステナビリティ学の普及を図った点は、社会的認知を高める観点からも高く評価できる。

今後は、国際会議の継続した開催、学術雑誌の継続的な発行がより社会的な理解と認知をすすめる上で必要であり、また、学術以外の市民・国民等への波及が求められる。

2. 事業の実施状況

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 拠点機関ひいては日本のプレゼンスを高めるための取り組みが、拠点機関全体として、戦略的かつ計画的になされたか。 ・ 拠点機関及び協力機関において、適切な運営体制・国内外の連携体制がとられていたか。
-----	--

評 価

- 非常に効果的に実施された。
- 概ね効果的に実施された。
- ある程度効果的に実施された。
- 効果的に実施されたとはいえない。

コメント

・ 拠点機関ひいては日本のプレゼンスを高めるための取り組みが、拠点機関全体として、戦略的かつ計画的になされたか。

国際サステナビリティ学の学問及び国際交流の発展のため、日本側拠点機関が主導して、ICSS の開催及び国際学術雑誌の発行を行っていることは、極めて有効なものと考えられる。単発的なセミナーと異なり、学会による研究交流は、今後も継続的に続くことが期待できる。

日本側拠点機関は、サステナビリティ学発展の中心的な役割を担うことで、日本のプレゼンスの高さを盤石なものにしたと評価できる。

・ 拠点機関及び協力機関において、適切な運営体制・国内外の連携体制がとられていたか。

国際サステナビリティ学は、学際的な学問領域であることから、国際的な研究機関の連携および様々な学問領域を横断する学際的な研究者の組織化が不可欠である。拠点機関では、様々な学問領域の研究者が参画しており、海外の関連機関と協力して国際的なネットワークを構築するとともに、様々な学問分野のトップレベル研究者を組織化するなど、国際サステナビリティ学の構築に向けた適切な運営体制が行われてきた。それに加えて、セミナーの開催についても、適切かつ効果的な体制がとられてきた。このことから、国際的な研究ネットワークの構築に向けた適切な運営体制ができていると判断される。

3. 今後の研究交流活動

観 点	・ 当該研究交流課題の今後の研究協力体制の維持・発展に向けた展望について、事業終了後においても継続的に代表制を維持することが期待できるか。
-----	---

評 価
<input checked="" type="checkbox"/> 大いに期待できる。 <input type="checkbox"/> 概ね期待できる。 <input type="checkbox"/> 一層の努力が必要である。 <input type="checkbox"/> 期待できない。
コメント
<p>・ 当該研究交流課題の今後の研究協力体制の維持・発展に向けた展望について、事業終了後においても継続的に代表制を維持することが期待できるか。</p> <p>ISSS の運営および国際学術雑誌 Sustainability Science の発行について、継続可能な形態とすることに成功しており、拠点機関が引き続き中心的な役割を果たし続けていく基盤が形成されたものと評価できる。</p> <p>また、日本側研究拠点は、Future Earth 事務局のホスト機関であり、サステナビリティ学の最も重要なフィールドの一つであるアフリカの主要大学との連携に成功していることから、連携する海外機関を超えたより広い世界的ネットワークにおいて、本事業の研究成果をさらに新たな国際的な研究へと発展させていくことが期待できる。</p>